

Title	マカオのコレジオ(一)
Sub Title	A college of Macao (1)
Author	高瀬, 弘一郎(Takase, Koichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.3 (1996. 1) ,p.1(161)- 38(198)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960100-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960100-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## マカオのコレジオ (一)

一

一五九四年マカオにイエズス会のコレジオが創設された。その名称はサン・パウロ・コレジオである。<sup>(1)</sup>日本のキリシタン教会とも、非常に縁の深い機関である。コレジオは日本国内にも作られたが、マカオのコレジオは規模・内容ともに、それより充実したものであった。以下この、マカオのサン・パウロ・コレジオに関し、可能な限り解明を試みる。

サン・パウロ・コレジオは、日本と中国の両布教地に関わるので、それら両キリスト教会関係の多くの文献・史料に、関連の記事が見える。同コレジオに関する研究としては、マヌエル・テイシエイラの論著を真先に挙げべきであろう。<sup>(2)</sup>テイシエイラの研究を参照しつつ、同

マカオのコレジオ (一)

氏はしかし、最も重要な史料群であるイエズス会の原文書を使っていないので、主としてこれらの関係史料に拠って以下論述する。

二

コレジオの創設は重大事である。サン・パウロ・コレジオも、創建に至るまでには紆余曲折があった。当のインド管区内にも、設置には強い反対意見があった。「ゴアで開催されたパードレたちの協議会<sup>ジュンタ</sup>において、イエズス会のコレジオをマカオに創建すべきでない」とされた諸理由<sup>(3)</sup> (執筆時・筆者ともに不明、仮にA文書と呼ぶ)と題する史料がある。ローマ・イエズス会文書館 Jap. Sin. 23, ff. 285-291 であるが、すぐ続いで Jap. Sin. 23, ff. 293-296 も「当地ゴアで開催された協議会<sup>コンセルタ</sup>において、

一 (一六一)

イエズス会のコレジオをアマカオに創建すべきでないと言われた諸理由」(執筆時・筆者ともに不明、仮にB文書と呼ぶ)と題する文書である。本文は、文意に関わりのない細部の異同が若干ある外、B文書には些細な文章の省略が少しばかりある。ここではA文書によって、以下その全文を邦訳、紹介する。(なお本文書は極めて文章が難しく解釈に難渋した。史料は可能な限り逐語訳をすべきであろうが、それが叶わず止むを得ず大意をとって訳文にした箇所もある。しかし文意を大きく取り違えた所はないと思う)。

「第一、イエズス会の会コンステイトウインソエス 憲デクレトスと総会議指令および通常の慣行プラシエは、確実にして充分なレンダなしに、またそこで養育され、そこに滞在する仲間たちを養うための経費をどう賄うか、その望みもなしに、コレジオを創建することを嫌う。この理由の証明は、〔会憲〕第四部・第六部に明らかである。またそれら〔会憲・総会議指令〕の他の多くの箇所から推し量ることが出来る。レンダへの期待に関してであるが、多くの困難な戦いに明け暮れている時であり、領国エスタドの窮状や、国王と彼の役オフィシアエス 人コンセリエイロスや顧問たちがあまり好意を抱いていないことを考え合わせ、恩恵など期待すべきではないということ

悟らされる。ことに彼らがイエズス会から、その有するものを奪ったのをわれわれが見たのであるから、なおさらである。まことに冷たい仕打ちであって、彼らは正義と法に則って彼らのものを与えようとしながしはしばしだし、われわれの要求に耳を藉そうともしない。

また教皇パですら、大なる基金フンダメントを作らないに相違ない。彼がもしも何らかの恩恵を与えようという気になったとしても、このレンダの不確かさおよび、いかに大なる変動を免れないかということが、よく分かっている。というのはそれは確固不動のようであり、教皇の意向以上のものではありえないからだ。彼ら〔教皇〕の中には、それを増加する者もいれば、減じる者もいる。奪い取る者だっている。それ故すべてが常に決着を見ず、不確実で他人任せである。

第二、目指すべき目的は伸展であるのにそれに反して、キリスト教会を損なうことになる。増大・伸展すると巡察師パードレは思い込んでいるが、実はそこから少なからざる損害をキリスト教会が受けることになる。というのはこのコレジオを創建しようと思うなら、しかもそれは当然そこで養育がなされるようなカーザであらねばならないし、またそれはセミナリオであらねばならないと

いうように、万般整えられたものを作らうと思うなら、どうしてもその初期にあつては日本から、その重立つた人物を割いてこななければならない。その建物の建築すべて、およびその統轄・管理をするためである。院長・レイトル副院長・ミニストロ聴罪司祭・コンフェソル霊務長・プレフエイト・スピリトウアル学事長・プレフエイト・ドス・エストウドス文法・グラマティカ人文学・ウマニダデ哲学・フィロソフィア神学・テオロジヤ倫理神学の教師たち、およびこれらのスプスタイトワトス・デスタス・フアクルダデス権能の代理者たち・プロクラドル・オフィシアエス必要なその他の職員が、そこ「コレジオ」には入らねばならない。またその運営に必要なこれらの人々の如き、すでに養成が終わり、充分資格を備えた多数の仲間が、将来このコレジオから出られなくなるのは確実である。

もしもそれ「コレジオ」が、自らが養育・養成した仲間たちでは支えられないとなると、必要な人々以外の働き手を日本に送ることが、どうしても出来ようか。それは不可能なことだ。それどころか、常にそれ「日本教会」を消耗させることになるであろう。ことを始める時には、擁する最良の人材をそこに回さねばならないが、そのような人々をそこに提供することが出来ないであろう。それによりキリスト教会は、多大な損害を蒙るであろう。目指す目的が挫折するであろう。改宗事業のための。

コンヴェルサン聖職者たちが、講義や統轄のために束縛されることになるであろう。

第三、レトラス学問・エストウドス学習といった手段についても不都合をきたす。尊大かつ傲慢で、分派と新奇を好む傾きがあり、大なる教会分裂を惹き起す虞れがある彼ら「日本人」の本性を考慮すると、この点はそれ自体、その事柄の性質により非常に難しく、一人や小人数で決めてはならず、大勢からなる大がかりなそして永続的な審議の上で、日本人に学問をつたえるのがよい。というのは日本の法レトラス「宗教」は、その初期においては単一であったものが、全く異なつた、互いに反対の宗教の如き、あれ程多様な宗派セクタスに分裂したのであるから、私は神デオスの法においても同様なことが起り、多くの異端エレンジスと新奇が生まれることを恐れる。しかもそれは、対策を講じるのが困難である。というのは日本には、これを是正しようとする強制的権力ヴィス・コアクティヴァもキリスト教徒の王侯プリンシペスも領主セニョレスもないからである。その徴候はすでに時とともに表れており、内部的ドメスティコスな強力な手段を用いることが必要であつた。

もしも巡察師パードレが、ヨーロッパやその他の地域において、異端エレンジスが生まれるかもしれないが、学問レトラスを

教授しないわけにはいかないなどと言つたら、この決定は効力を持たないであろう。というのは、ヨーロッパの仲間ソジエイトスたちは日本人とは非常に異なっており、しかもプリンセス王侯は皆カトリック教徒であるが、それだけでなく当地では、自ら生み出さない限り、現地レトラドスで学識者の補充をするすべがない。というのはフランス人がスペインに来ることも、スペイン人がフランスに来ることもなく、各地がそれぞれ自国の者で賄う。しかし日本人は、外から「外国人の」補充を受ける方がうまくいき、間違いを犯す危険も、新奇に陥る虞れもない。「日本人の」仲間ソジエイトスは非常に尊大で、異教徒の領主たちまでが、誤りの内に彼らを助けることもあり得る。また彼らは非常に閉鎖的で、二〇年間も、否生涯ホンス僧ホンスたちは、自分の弟子たちホンスに自分の宗派に関する考えを明かさない。この外にも、これほど大勢の日本人がイルマンのままに留まっています非常に困惑している時に、日本人学識者レトラドスたちについて巡察師パードレはどうするつもりなのだろうか。

第四、日本人の側からの理由。巡察師パードレの狙いは、彼ら「日本人」に霊と信仰心の衣装で身を纏わせ、このようにして彼らを教化し、ヨーロッパ生まれの者たちと一致結束させようというものである。このようにし

て彼らと親密にさせ、気心が通じ、融合させようとする。しかし日本人は決して、そのようなことをする性格ではない。またわれわれの關係の諸々の事柄は、彼らには良く思われない。長い経験を積み、慣習に通じ、われわれと付き合いを重ねても、彼らに徳操とは何かを示すことは出来ない。パードレたちが日本で追求するものは、彼らが想像しているような、インウエンサン虚構を企んだり、生活の糧を求めたりするためではなく、真実を求め、救済を望むだけだ。彼らにはこのことが、絶対に分らないようだ。このコレジオが創建され、彼ら「日本人」をそこに居住させれば、容易にこの真実に触れることが出来、パードレたちが彼らに教える事柄についての事例を、不断に目の当りにすることが出来るようになるであろう。しかしこのような方法は、その狙いと目的から全く遠いものであることは確かだ。というのは日本人が、霊・徳操・宗教的意見・神の法を身に纏うためには、マカオの如き、教俗両界において躓き・貪欲・不正・憎しみ・争い・ディフンソニエス死・モルテス死・無秩序を毎日目の当りにする所に、彼らを置いてはならないからだ。

彼らは家の中では、それとは違い徳操と信仰心の事例を見るであろう。しかし神の法はすべての人々に同じ結

果を齎らすわけではないので、まるで彼ら自身の「宗教」同様、虚構イソウエンサンと分派セツクの如く彼らに見えるかも知れない。丁度日本の仏僧ボシツスたちがそうするのを常とする如く、パードレたちは内面に持つものとは違うことを教える、と彼らには見えるかも知れない。彼らの多くは、われわれについてこのように想像しているのだ。またわれわれがポルトガル人たちに教える法と、彼らに教える法とは異なるのだと、彼らには見える知れない。

そのため、この意図・目的を遂げるために獲得すべき場所は、マカオではなく、況んや長崎でもなく、これらよりもはるかに遠くの、ポルトガル人との貿易以外の地に見出だされるであろう。もしも日本においてはその意に反して神の法を持つが、実は最大の反キリスト教徒が、そこ「マカオ」に行くポルトガル人の躰シニョレス・頽廢・無秩序を見てしまった日本人であるなら、また最悪のキリスト教会ダダスが、彼ら「ポルトガル人」が貿易をする諸港のキリスト教会であるなら、このコレジオやそこに居住する日本人たちから、一体いかなる実りが期待出来るか。なぜならそれは、極めて躰シニョレスに充ちた、そして邪悪な多くの事例が、常時見聞きされるような土地にあるのだから。

第五、「コレジオを作る」土地に関する危険。日本人に深い憎悪の念を抱き、まるで敵や盗人の如く彼らのことを嫌悪し、忌み嫌うシナ人の土地にこのコレジオを作ろうというわけである。彼ら「シナ人」が自分の土地に、自分たちの敵であり、しかも盗人だと思ひ込んでいる人々のセミナリオを作るのには同意しないだろう、許可を与えようとしないだろう、との危惧を抱いたとしても全く当然のことである。特に、彼ら「日本人」が彼ら「シナ人」に戦をしかけ、暴君テイラフスという以外に何の理由もなく、彼ら「シナ人」の土地を奪おうとするような時である。彼ら「シナ人」は臆病で、猜疑心が強いので、その「コレジオ創建の」こともまた、もしやポルトガル人たちがセミナリオを作るという口実で、日本の王レイイスたちや領主セニョレスたちに誘われ、後に皆が一致結束して蜂起するのではないかとの深い疑惑を、彼らに与えるかも知れない。また恐れと恐怖から、このセミナリオを破壊するよう唆されるかも知れない。というのは、如何に莫大な経費をかけ多大な労苦を費やして、岩石を割り、山を削り、壁を作っているのかを彼ら「シナ人」が見て驚いているのを、既にわれわれは知っているからである。

したがって、巡察師パードレが記しているように、彼

ら〔シナ人〕がしゃべらないように、銀の延べ棒や相当な賄賂で彼らを黙らせねばならないという仕事を、彼ら〔イエズス会士〕は考えている。今は統治者たちに多大な賄賂を贈れば、何らかの効果もあるが、彼らは永久にその地位にあるわけではなく、三年毎に替わる。そのため、新たに〔統治に〕入る者たちを、常に買収せねばならないであろう。これは多額の税を負担することになる。というのは贈与したり贈賄したりする程のことではないからである。さもなくば彼らの聖務が、部分的にまたは全面的に危険に曝されるのに堪えねばならないことになる。この建物を破壊するよう命じたり、何らかの暴動を起こすのを望んだりするであろう。これによってマカオに滞在している者たちが被害を受けるだけでなく、皆同じだということが分かって、シナ国内にいる者たちも国外に追放を命じられるであろう。

またこの事がないとしても、その不都合は小さくない。妻帯者が一〇〇人しかない所に、偶々教区司祭の人数や修道士のカーザの数が増えると、民衆に多大な圧迫を与える。かつては全員の世話をするために、われわれの仲間のパードレが二人いれば充分であった。それが今は、カーザに二人、コレジオに五〇人居らねばならず、さ

らにすぐにそこに修練院が必要だと思われるようになるに相違ない。もしもそれを作るなら、当地ゴアにおいてこれら三軒のカーザが一緒に存在した時と同様の混乱が生じるであろう。

第六、この領国の側の不都合。創設されるコレジオは自力では維持することは出来ず、この管区も必要な人員をそこに供給することは出来ず、どうしてもフィリピン経由で、スペイン人にこの人員と補給を求めざるを得ない。このため、非常に危機的な不都合に陥ることになり、全インドとポルトガルにおいて、これを非常に遺憾に思い、悪感情を抱くであろう。そしてイエズス会に対し、何らかの迫害が勃発する契機となるかも知れない。またそれは、われわれがスペイン人のために、彼らがシナに来るための門戸を開いてやることになる。ポルトガル人は、武器・投獄・財貨とナウ船の没収と差押えといった行為を駆使して、彼ら〔スペイン人〕に対して執拗な抵抗を今後もするであろう。

それ故この領国にとって、スペイン人のためのこの商業も、出入り口も存在しないことが重要である。国王陛下はまさにこれと同じ理由で今年副王に対し、何人たりと、たとい修道士であっても、この領国から他の領国に

行つてはならないし、向こうからこちらへ来てもらえない、と命じた。またこの移動を企図した者凡てに死罪を科すことにした。

第七、自力で維持することの出来ない、基金状態の悪いこれらのコレジオや、同じくセミナリオによって受けるイエズス会の損害。この損害は、非常に甚大であり、総会長パードレはこれについて、イエズス会全体に普く報せねばならない程である。それを遺憾とし、今までこの点で不注意があつたことに心を痛め、この極めて行き過ぎの行為が惹き起した害を遮ることを希望しつつ。

第八、この管区の大なる損失。このようにして、完全に手足をものがれ、非常に押え付けられるからである。即ち、そこで学習と講義が行われるために、教師たちや優秀な仲間たちをそのコレジオに供給することを余儀なくされる。というのは、それ「コレジオ」は自力では維持することが出来ない。また入会を許され、学習を終えて後に、彼らの教師たちの職を継承することが出来るだけの、才能・能力の持ち主がいけない土地に存在する。

改宗事業のための聖職者たちや、既にこれまでそこで奉仕してきて疲れている人々を、講義のために引き抜くようなことはすべきでない。当管区は必然的に、その

組織全体を維持することになる。それは絶対に不可能なことだ。というのは当地の固有の必要に対してすら、対応が満足に行われず、しかも多大な難儀が伴う。当地に存在する「組織」以外にも、マカオのコレジオに、教師と生徒を供給せねばならないが、双方共に供給が満足に行われないことになる。

巡察師パードレが今年要望した布教団にこれが認められる。この布教団ですべてが送られた。「ゴアの」サン・パウロ・コレジオには、一層大勢の生徒がいるからである。神学には、三―四人の神学課程在学者がいる。各学年なお二人以上必要である。第四学年は三人である。この三年間に神学は神学課程在学者一人だけしか生まれず、病気になった者は一人もいない。彼らは教師とその代理人になるべき人々である。その他すべての仕事に、彼らが当らねばならない。今から三年後に始まる課程には、もう少し多くの者が入ってくるであろうが、彼らは皆かなり脆弱である。

これほど僅かな人数の、しかもこれほど脆弱な生徒をこの管区に供給するにも、大勢の仲間・教師・聴罪司祭・説教師、および働き手が必要であるが、そういった人々を引き出すことが、一体どうして直



ぐに可能なのであろうか。人が大勢いる所でも、  
フアケルダデス教授陣と講義を支えるだけの適性を備えた者は、非常  
 に少ないことがわれわれに分かつているのであるから、  
 これほど僅かな人数しかない所では、一体どうなるで  
 あろうか。

第九、この外に、クラスとエスコラ学校を増加し、その義務  
 を負うことによつて管区が蒙る別の損害がある。インド  
 がポルトガルに大いに依存していることは確かである。  
 彼地〔ポルトガル〕から来る仲間ソジエイトスたちが、インドにおい  
 て必要だからである。優秀な仲間を常に渡来させるため  
 には、当地に來たいという熱心な希望を常にあの〔ポル  
 トガル〕管区内に保持することが、「インド管区のため  
 に」非常に重要である。そのためこの、リソシエス教科と  
クラスクラスを増加させること程、大なる障害になるものはな  
 いと思う。というのはいわれわれは、そこ〔ポルトガル管  
 区〕ではがもうすでに、「インド行きに」何かしら冷淡  
 になつてゐることを知つてゐる。嫌悪の氣持の原因は、  
 まさにここにある。彼らは、「インドには」來たくない  
 と言う。というのはいわれらに講義をさせてしまつて、キリ  
 スト教会のために神に召し出された職に、従事させない  
 からである。講義をするなら、ポルトガルにおいて、し

かもインドのエスコラ学校よりも優秀な学校で講義をするのだ  
 から。

第一〇、当地から派遣せねばならないために、  
ソジエイトス仲間たちを失うこと。さらには彼ら〔仲間〕が其処〔マ  
 カオ〕で学習するよりも、当地〔ゴア〕でやつた方がよ  
 り一層日本のためになるにもかかわらず、その利益を  
 失つてしまうこと。この布教が仲間の大きな損失なしに  
 はなし得ないことは、経験が充分示している。殊に学問  
 においてそうで、彼らが日本において非常に能力が秀で  
 ていることは明らかである。彼らは彼地〔マカオ〕で  
テオロジヤ神学を学習するために、当地でそれを学ばずに行つた  
 が、今なお彼らはそれを何も知らない。もしも彼らに  
 とつてその機会があつたのなら、今ではもうすでに彼ら  
 は学問を終え、この管区は彼らをメストレス教師として派遣して  
 いることであろう。彼らはまだ何年も、なお生徒ディシプロスであ  
 り続けることになるかも知れない。

このことは、彼らの学習が終らないという仲間ソジエイトスの  
 損失を示すだけでなく、当地で彼らの学習を完了させて、  
 それが完了した彼らを派遣する方が、彼地〔マカオ〕で  
 彼らに学習させるよりもはるかによいことを示し  
 ている。というのはいれらの方が、彼らにとつて時間・

年月の節約になるからである。このようにすれば、彼らは職務に対して一層その資格を備え有能になるであろう。尤も言語の学習については、彼らは全くそれを知らない。ので、非常にしばしば彼らの学習を中断せねばならない。尤も学問レトラスに対してすべての時間を充てても、彼らの言語もその他の事柄も、適切な習得に至ることはないであろう。

第一一、この理由に更に別の、軽いとは言えない理由が加わる。すなわち、彼地〔マカオ〕では学ぶことが少ししかないということが当地〔ゴア〕で分かっているし、またイルマンたちを、学習をやり遂げることの出来る所から引き抜いて、その希望が余り持てない所に送ることになるので、彼らは従順であつて常に命令に服従するとは言え、服従をすることが非常な嫌悪の原因となつてゐることは否定出来ない。そこで時折、誰か行くのを拒む者がいたら、その者たちについては断念せねばならないであろう。というのは、もしも彼らがこの嫌悪の気持ちを持ち、彼地〔マカオ〕は益するところ少ないのを見て、コチンやバサインに行つて禁欲して学習するようなら、諸事捗らないシナへ進んで行こうなどという気持ちを抱く者は、尚更でないからだ。

第一二、創設される時期が不適當である。つまり日本の諸々の事柄の状態が、非常に不確実かつ不透明である。それ故、かかる「コレジオ創建の」騒動がいかに厄介なことを惹き起すか、その顛末を見せつけられる以前に、「日本の諸事情が」落ち着くのを待ち、時とともにどう決着がつくかを見届ける方が、はるかに的確な措置だと思われる。

第一三、巡察師パードレの問題。というのはそれは、イエズス会総会長でも一人では壊すことの出来ない大きな事柄で、彼が一人で作るにはそれは余りに大きなことだ。というのはもしも巡察師パードレが、コンステイトウインニス 憲や総会議デクレトス指令に反してこのコレジオを創建することが出来るなら、そして既にそれが創建され、コレジオをなしているのなら、総会長といえどもコンクレガサン 総会議に諮り、投票を求めることなしにそれを壊すことは出来ない。会憲がそう規定し、命じているからである。というわけで、インステイト 憲以外は作ることが出来ず、最上位者が壊すとはスベリオル 上長が自分一存で作れるなどということを、どうして認めることが出来ようか。

第一四、法的にも事実としても日本とシナの上長である「インド」管区長の許に、これの早急な遂行に關して

報告がいつていない。彼地〔マカオ〕で作られるものについては、彼は知らねばならない立場にある。あのコレジオはこの〔インド〕管区を構成する一機関であるが、同管区にこれに関する審議と勧告の機会を与えていないし、遅滞の虞れなしに抗議をする時間をも与えない。この問題を巡って総会長が諮問して意見を求める<sup>コングレガサ</sup>総会議の回答が、ローマから届くのをどうしても待てないだけの理由もない。管区代表を派遣して、重大な問題の一つとして討議されることもなかった。総会長<sup>スア・パテルニタデ</sup>下が特にそこで諮問に与ることもなく、彼〔総会長〕の決定と最終的な裁定<sup>アセント</sup>とを待つこともない。総会議<sup>コングレガサ</sup>を開催することも、これらの疑問を討議することも、管区代表たちをローマに派遣することも、彼らの経費を負担することも、必要ないであろう。というのは、総会長は法的にこの地に存在するのだから。以上の如き事柄は疑いなく、イエズス会歴代総会長が有する見解と権威とを、大いに害うことになる。彼らの決定と裁定<sup>アセント</sup>とは、非常に尊重され、遵守され、その他のあらゆる見解よりも優先されねばならない。

第一五、最後にわれわれは、このコレジオを創建することを総会長はよしと思わず、承認もしておらず、設立

しないように命じているのだということを描する。ということとは、総会長はそれを予見し、前以て決定を下し、そしてそれを不可としたということを意味する。もしもそれについて、既に着手してしまったので、作らねばならない、もう手の打ち様がないと言うのなら、その対策はそれを壊すことであろう。総会長<sup>スア・パテルニタデ</sup>下がそう命じることであろう。会<sup>インステイト</sup>憲よりも建物が壊す方が、まだ良い。管区よりも壁を壊す方がまだ良い。これにより総会長<sup>(3)</sup>下が、総会長たることを良く示すことになる。

難解な文章ではあるが、一読して明らかのように、ゴアにおいて何人かのイエズス会パードレが協議会を開いて、マカオにコレジオを開設する件を取り上げ、検討した結果、それに反対する結論に到達した。その反対の理由を文章にしたのが、すなわち本文書である。先に記した通り、執筆時・筆者ともに不明であり、誰が協議会に出席したのかも不詳である。協議会<sup>ジュンタ</sup>の性格も、東インド管区の複数のパードレがマカオ・コレジオ創設の件で開催、それに反対の意思表示をしたもの、ということ以外にその詳細は不明である。B文書には「協議会」の原語が *consilia* とある。一般的には諮問をして、協議の上の答申を求めるものを言うのであろうが、ここではA文

書・B文書の表題の文言の違いに然したる意味があるとは思われない。右文書には年代が記されていないので、協議会開催時不詳である。ただ同コレジオは一五九四年に開設されたのであるから、それを遡ること余り遠くない時期であろうといふことは、一応推測出来る。

協議会に出席したパードレであるが、このような重要な意味を持つ協議がゴアで開催されるについて、東インド管区長が無関係であったとは考えられない。フランシスコ・カブラルは一五九二―九七年東インド管区長を務めた。<sup>(4)</sup> 時期的にも、またその趣旨からも、この協議会が東インド管区長カブラルの主導の下に開催され、彼の意向に添って結論が導き出され、右の文書が作成されたと判断してよいであろう。マカオ・コレジオの開設は巡察師ヴァリニャーノが強力に推進した結果であるが、ヴァリニャーノとカブラルは、ここでも鋭く意見が対立した。

右の文書の趣旨を次に整理する。

一、会憲等イエズス会の規定では、レンダ等経済的裏付けなしにコレジオを創建することを嫌う。主に会憲第四部・第六部<sup>(5)</sup>に拠る。国王・教皇ともにそれに対する、<sup>(6)</sup> 確実かつ安定した経済的支援は期待出来ない。

二、マカオ・コレジオを創建するには、日本教会から重

立つた人材を割いて来なければならぬ。即ち、院長・副院長・学事長・各教科の教師・プロクラドル等である。こういつた人材をコレジオが自ら養成出来ないとなると、日本教会は常にそこに人を割かねばならず、多大な損害を蒙る。

三、分派・分裂を生みがちな日本人の国民性、およびキリスト教徒領主の下で強制的権力を行使することが出来ない国情等により、教会分裂を来し、異端を生む虞れ大であるから、日本人に学問を伝授するのは、充分慎重に運ばねばならない。日本人に学問を伝えて学者を養成するよりも、ヨーロッパから学識者を連れて来る方が危険性が少ない。

四、巡察師ヴァリニャーノの狙いは、日本人を教化してヨーロッパ人と一致・融合させることにあるが、日本人にはそれは望めない。マカオは教俗にわたって躓き・頹廢・無秩序等に充ち、そこに日本人を置いても、教化は期待出来ない。彼らの教化に実をあげるにははるか遠くの、ポルトガル船交易地以外でなければならぬ。

五、シナ人は日本人を憎悪・敵視し、忌み嫌う。そのシナ人の地にコレジオを作ろうという。日本人が理由な

くシナ人に戦いを仕掛けるような時に(天正二〇年三月一二日〔一五九二年四月二三日〕文祿の役第一陣出港、文祿二年五月一五日〔一五九三年六月一四日〕石田三成・小西行長ら、明使謝用梓らを伴い名護屋に戻<sup>(7)</sup>る)、コレジオを設立したりするとシナ人は、そこに何か政治的野望ありはせぬか、これは口実で実は、日本の国王・領主の画策で反乱が起きはせぬかとの疑惑を抱くかも知れない。シナ人たちに対する贈賄も必要になる。

六、マカオ・コレジオは自力はもちろん、東インド管区としても人と物の面で維持することは出来ず、どうしてもフィリピン経由でスペイン人に、その支援を求めざるを得ない。それはスペイン人のために、シナの門戸を開いてやることだ。ポルトガル人の利を損ない、イエズス会への迫害を惹き起すかも知れない。

七、自力で維持出来るだけの経済基盤を持たないコレジオを抱えるのは、イエズス会にとって甚大な損害である。

八、マカオでは、教師を養成することは出来ないし、布教に従事する聖職者に講義をやらせるべきではない。となると、同コレジオをまるごと東インド管区が支え、

同コレジオに教師と生徒を供給せねばならない。ゴアのサン・パウロ・コレジオに現在神学課程在学者が三〇四人いるだけで、この三年間に同課程在学者は一人しか生まれなかった。それでも教師等多数の人員を要するのだ。他に振り向けるだけの余裕などない。

九、東インド管区に更に授業・クラス・学校が増え、その関係の義務負担が増すと、ポルトガル管区の優秀な会員たちが、インドに渡来したいという希望をなくすことになる。講義を強いられて、布教に従事することが叶わないからである。

一〇、会員を同じ日本に派遣するにしても、ゴアでの学習を途中で止めてマカオでその後を続けるよりも、ゴアで学習を完了して派遣する方が効率がよく、成果が上がるが、それが損なわれる。尤も言語に関しては別である。

一一、マカオでは学習が充分出来ないことがゴアで分かっているのだから、会員たちがマカオ行きの命に服するのを、嫌悪するようになる。

一二、日本の国内事情が不確実・不透明で、コレジオを創設するには、今は時期的に不適當である。(これが何を指しているのか、必ずしも明らかではないが、やは

り秀吉のキリシタン禁令発布のことを言っているのであるか)。

三、総会長といえども総会議の議を経ることなしに廃止出来ないようなコレジオを、巡察師が独断で創建することを認めるわけにはいかない。

四、日本・シナの上長である東インド管区長の許に、同コレジオ創建に関する報告がない。総会長の裁断を仰いでから、という手順も踏んでいない。

五、総会長はその設立を承認していない。既に創建に着手にしまったと言うなら、執り得る対策は、総会長がそれを壊すよう命じることだ。会憲を破壊するよりも、建物を破壊す方がましだ。

一五項にわたってコレジオ設置反対の理由を表明した文書の内容の趣旨を、各項毎に纏めると右のようになる。

1、一・七・一三・一四・一五は会憲等に則った手順を踏まえていないこと。

2、三は日本人の国民性からして、そもそも日本人に学問を伝授して学識者・司祭に育てること自体反対だというもの。

3、二・四・六・八・九・一〇・一一は独自にそのコレ

ジオを維持することは叶わず、ゴア・日本・フィリピン等から人材その他の支援を仰がねばならない。つまり他に迷惑が及ぶ。マカオに設置することは疑問で、同地では内容の充実した教化・教育は期待出来ないこと。

4、五・一二は、外部環境が整っていないこと。

右の2は、日本人を教育して宣教師に育成すること自体に反対だというもので、明らかに管区長カブラル等の意見の反映と言ってよい。ただその主張を貫くなら、日本人のためのコレジオを創建すること自体一切反対ということになり、他の反対理由とは噛み合わない。

もっと現実的な反対理由としては、矢張り三に力点を置いていると言うべきであろう。

2と3は反対理由として、従って整合しているとは言えないが、同文書の謳う主たる理由と見做してよいであろう。

### 三

マカオ・コレジオ設置に反対した協議会記録の全文を右に紹介したが、巡察師ヴァリニャーノがコレジオ創設を推進する立場から、本記録に反論を加えたと思われる

文書がある。<sup>(8)</sup>この文書も並べて紹介出来るるとよいのであるが、これは文書の伝存状態が悪く、全文の判読が極めて困難であるので、断念を余儀なくされた。但しヴァリニャーノの本件に関する見解を知る上では、他に史料が数多くあり、別段支障はない。後に紹介する。

東インド管区長カブラルは右に記した通り、恐らく先の協議会を主宰したものと思うが、それとは別に彼自身、一五九六年一月一日付け（コレジオの発足直後）ゴア発、総会長補佐宛て書翰の中で、コレジオ設置に反対する旨述べている。この書翰は既に邦訳、出版した<sup>(9)</sup>ので、ここではその書翰の本文の引用は避け、関係記事の内容を纏めて記す。

一、日本人はイエズス会入会と司祭叙品には不適性とす  
る、周知のカブラルの日本人観を縷々記述する。すな  
わち、日本人の傲慢・貪欲・無節操・欺瞞・野心的性  
行を例を挙げて説明し、彼らに哲学・神学を授けると、  
仏僧の如く分派をなす虞れがあること。生来邪悪な性  
癖を有し、紀律ある修道生活には不向きであること、  
等を記す。

二、ヴァリニャーノがマカオ・コレジオを推進する主たる理由の一つは、日本人イルマンがポルトガル人の社

会に暮らすことによつて、その「文化的」影響を受けることを狙つたものであるが、古来の伝統的なものに固執する傾向が強く、それに順応しない者を野蛮人と見做す日本人の国民性からも、またマカオ社会の現実からも、到底それは期待出来ない。

三、マカオにイエズス会の機関として、カーザとコレジオ  
オ——ドゥアス・リソンエス・デ・テオロジヤ 神学 一—ウア・デ・カゾス 教科・倫理神学 一教科・  
ウン・クルツ・デ・アルテス 哲学 一課程・ドゥアス・クラセス・デ・ラテン ラテン語 一クラスを持つカリキュラ  
ムの規模から、大学と称した方がよい——とが存在し、  
そのコレジオに五〇人を擁することは、マカオ住民の  
数とその教育水準から不可能である。

四、マカオにコレジオを作ることは、商業活動という危  
ない基盤の上に、重要な教会機関を設置することにな  
る。

一はそもそも日本人を教育して、司祭にすること自体  
に反対するものであるから、既に二以下の議論は不要と  
いうことになるが、二はヴァリニャーノが特にマカオに  
コレジオを設置しようという狙いに対して疑問を呈した  
もので、以上一・二は彼の日本人観に基づく根本的反対  
論。三は、後述する通りヴァリニャーノは、インドや

ヨーロッパから人材を招聘しようと言っているのだから、的確な批判とは言えないようだ。四のコレジオが商売に「汚染」されるといった危惧は、次に引くサンデの書翰にも見える。

\* \* \*

同じくマカオ・コレジオ設立反対論であるが、一五九三年一月一五日付けマカオ発、ドウアルテ・デ・サンデの総会長宛て書翰の一節を紹介する。

「巡察師パードレ〔ヴァリニャーノ〕が情熱を傾注して始めた、彼が日本のコレジオと呼んでいる新しいコレジオの新規建設事業について、少し触れたい。彼地〔日本〕で開催された管区会議において示された日本準管区の見解に基づいて、彼が設立するのだと言う。それは、此処で日本人イルマンを養育し、学習させ、われわれの慣習を身につけさせるためである。私はこれに異論を唱える必要はない。というのは、このような事柄については、着手する前に猊下の伝言を待つ方がよいと常々思っているからである。何故なら、こういった事柄は、事後であっても猊下に承認してもらえることが、経験で分かっているからである。それは既に始まっている、ゴアのカリーザ・プロフェッサで起った通りである。

マカオのコレジオ（一）

しかしこの件についての私の見解は、当地に作られる以上、このコレジオはその民衆の同意を得てなされるべきであるし、この民衆に重圧を掛けない人数にすべきだと考える。彼らは大勢の修道士のために、重圧に喘いでいる。たといコレジオが喜捨で生きるものではなく、したがってそれほど迷惑を掛けないものであっても、同パードレが決めたように、五〇人の修道士を擁するものだと、重圧を感じないわけにはいかない。すなわち食糧には常に困窮することになる。これは大部分は、マンダリンに税金を支払うことなく、密かに齎される。もつともいくらかは、公然とあからさまに齎される。

さらに私は次のように思う。シナのセミナリオを作ろうとわれわれが考えていた、そしてそのために、当地で死亡した一人の富裕な司祭からの五〇〇クルザドの喜捨を得ていた、その同じ場所同じカリーザに同パードレは日本のコレジオを建てることに決めたのだ。日本の現在の必要のみに目を向け、シナの将来を慮ることをしない。それを余り意に介さない。また事実、目下それに対しては余り為すべきこともない。しかし少なくとも、その「シナの」将来の便宜には配慮すべきである。そのためこのマカオのカリーザは非常に手狭になり、広げる場所

一五（一七五）



もなく、シナのセミノリオの便宜が失われている。それ  
〔セミノリオ〕は、後にこの大きな王国の改宗の助けに  
なるよう、シナ原住民をそこで養育すべく、住民たち自  
身が当地を希望しているのだ。

私の考えでは、日本が目下締め付けられているので、  
余り向上していない者たちの避難所として、このコレジ  
オ建設の構想が立てられたのであろう。迫害が終つたら、  
そこに居住する者はおらず、また必要もなくなつてし  
まつて、それが維持されなくなると思う。日本人の名が  
これほど憎悪されているシナよりも、長崎の方が良いと  
思う。日本人のコレジオが当地にあるなどと言うと、シ  
ナ人たちがどう受け取るか分からない。現在当地にいる  
日本人たちは奉仕をしていて、奴隷であり捕われの身で  
あつて、余り関心を惹いていないが、日本人修道士がい  
たらどうなるであらうか。

最後に私は次のことを指摘したいと思う。即ち、シナ  
布教のために働くことになるわれわれ仲間たちを、巡察  
師パードレは同じ日本人のコレジオに置くことに決めて  
いるが、それは少なからず不都合だと思われる。という  
のは、いろいろな言語、まるで反対な慣習を学ばねばな  
らないので、彼らが同じ部屋にいることは出来ないよう

に思われるからである。以上のすべてを、私は率直に提  
起した。というのは私は主において、このように思わざ  
るを得ないからである。

これら二つのカーザの上長たちの間に生じるであろう、  
他の不都合もある。というのは、コレジオのカーザでは  
常に、売買や商人たちとの取引が行われることになるう。  
喜捨によつて生きている者たちにとつて、少なからざる  
迷惑がそこから生じるであろう。そのようなことは、大  
きな町でなら隠蔽することも出来るが、ここ〔マカオ〕  
ではそれは不可能である。ここはインドの最大の町の一  
つである旨上に述べたが、ゴアを除きインドのいかなる  
町も、イエズス会のカーザを二つも擁することは出来な  
いのだ。猓下は主においてよしと思ふことを為してい  
だきたい。しかし〔猓下が〕返事をする時には既に、巡  
察師パードレの情熱に従つて、万事行われてしまつてい  
るものと確信する。神が彼に対し、彼の職務に応じた情  
熱をお与えになったのだということは、否定出来ない。  
しかしこの件では、日本の利益を願う気持が彼をして、  
その他の不都合には目を覆わしめているのではないか、  
私には分からない。<sup>(10)</sup>

この書翰を書いたサンデは、マカオ・コレジオの前身

と言うべきマカオのカーザの院長兼シナ布教<sup>スベリオル</sup>上長であり、またコレジオがカーザから分離、創設されて後一五九四年一月一日以降九七年九月まで同コレジオの院長兼シナ布教<sup>スベリオル</sup>上長<sup>(11)</sup>を務める。その彼がマカオ・コレジオの設置に、反対を唱えている。反対理由を次に整理する。

一、ヴァリニャーノが意図しているような五〇人を擁するコレジオは、たといその経済基盤が喜捨によるものでなくとも、特に食糧等の面でマカオ住民の重圧になる。

二、イエズス会はシナ布教のために、マカオのカーザ内にシナ人のセミナリオを設立する計画を立てていたが、その同じ所にヴァリニャーノは日本人のコレジオを作ることを決め、既に着手した。このためカーザが手狭になり、今後シナ人のセミナリオを作ることが困難になった。

三、日本人のコレジオは、日本国内の迫害を逃れたい弱い信徒の避難所として、計画されたのではないか。迫害が終つたらその維持は不可能になろう。マカオより長崎に作る方がよい。

四、ヴァリニャーノは、シナ布教を目指すイエズス会士を、日本人のコレジオに駐在させることに決めたが、

それは不都合である。それぞれまるで異なる言語と慣習を、習得せねばならないからである。

五、当コレジオでは常に商取引が行われることになるが、喜捨によって生きるカーザ居住のイエズス会士たちによつて、それは迷惑なことだ。

ヴァリニャーノは本コレジオを、五〇人を擁する規模にするつもりであったとサンデは記している(右の一)。しかし後に引用する、一五九三年一月一日付けマカオ発総会長宛ての書翰の中でヴァリニャーノは、コレジオの収容予定人数を四〇人とも、四一五〇人とも、四〇人とも<sup>(12)</sup>記す。同じヴァリニャーノは、一五九三年一月二日付けマカオ発総会長宛て書翰(後に引用)の中では、三〇一三五人と<sup>(15)</sup>記し、さらに彼は、一五九四年一月九日付けマカオ発総会長宛て書翰(後に引用)では、四一五〇人と<sup>(16)</sup>記す。ヴァリニャーノは収容人数について、幅を持たせて見込んでいたわけだが、サンデは、マカオ住民に迷惑が及ぶことを問題にしたのであるから、この点その上限の人数を記したわけである。

次にシナ人のセミナリオをマカオに作る事が、イエズス会士の間で計画されていたという(右の二)。マカ

オに創建されたシナ人のセミナーオは、一七二八年創立のサン・ジョゼ・セミナーオが初例の筈である。<sup>(17)</sup>したがってその計画がたといあつたとしても、実現しなかつたものと思われるが、詳細は不明である。第一、ヴァリニャーノが創建を意図したコレジオは、一五九三年一月一二日付けマカオ発総会長宛て書翰（後に引用）に見える通り、日本のみを対象としたものではなく、両国の布教事情から当面は日本に主力を注ぐが、将来的には日本とシナの双方の教会活動を展望した企画であつた。<sup>(18)</sup>

迫害対策の避難所としてコレジオを作るのなら、一過性であろうから、長崎に建てた方がよいとのサンデの意見であるが（右の三）、マカオにコレジオを創建することが話題になつていた当時、そのような避難所の必要性が大であつたとも思われぬ。言わば付随的理由とすべきで、ヴァリニャーノのコレジオ設立の主旨が、そこにあつたとは言えないであろう。第一迫害対策なら、尚更マカオに作らねばなるまい。

コレジオが商業取引の場となるからという反対理由は（右の五）、カーザは喜捨を財源とするのであるから、商業と深く関わる日本イエズス会のコレジオがそれに隣接して作られると、弊害が大きいというわけである。この

点はその後、まさにサンデが懸念した如き様相を呈し、統轄面でカーザの上長がそれを規制出来ない点が大きな問題になつたことは、私がこれまでに諸所に記してきた通りである。<sup>(19)</sup>

#### 四

次にフランチェスコ・パシオの書翰を取り上げる。一五九六年一月三〇日付け長崎発、イエズス会総会長宛て書翰である。彼は本書翰において、日本人の司祭叙品の問題と、日本向けのイエズス会コレジオをマカオに設立することの是非について、論じている。この二つは互いに表裏をなす問題であるから、同時に併せて論じたのは頷ける。パシオは準管区長（ペドロ・ゴメス）の教誡司祭・顧問・同伴者としての職責を果すために、本書翰を記したと断っている。パシオは特に、インド管区長カブラルのコレジオ設置反対論と、ヴァリニャーノのそれに対する反論を見た上で、この書翰を認めたと書いている。このカブラルの反対論とは、恐らくは先に引用した執筆時・筆者不明の文書である<sup>(20)</sup>うし、ヴァリニャーノの反論というのも、引用はしなかつたが先に触れた彼の文書の<sup>(21)</sup>ことであろう。パシオは基本的には、ヴァリニャーノの

企図への反対を表明しているが、然らばカブラルと同意見かと言うとそうでもなく、日本人を司祭に上げるに当って、イエズス会司祭ではなく教区司祭にする案を提示している。日本人司祭叙品の是非という、キリシタン教会が直面した最も厄介な難問に対して、言わば折衷案とも言えるような方策を模索した点興味深い。以下、かなり長文の書翰であるが、その全文を邦訳、紹介する。

「巡察師パードレ・アレツサンドロ・ヴァリニャーノはこの度、共に非常に困難な二つの企画を始めた。そして日本のパードレ全員および、インドのパードレの全員またはその大部分に反対された。それは即ち、マカオのコレジオを始めたことであり、日本人イルマンを三年で司祭に叙品する準備を始めたことである。ラテン語を学び、日本人の共通の課程に<sup>コルン</sup>応じて立派な成果を収めた者全員を、一〇人ずつ叙品することに決めた。これら二つの事柄は非常に重要であるし、日本のために大なる善かまたは重大な弊害を来す可能性があるので、私は準管区長パードレの<sup>アドモニトレ</sup>教誡司祭・<sup>コンスルトレ</sup>顧問・<sup>コンパニョ</sup>同伴者としての職務にある者の義務として、これら二つの事柄に関する私の意見を<sup>ヌマ</sup>狎下に書き送らねばならない、と思う。私は、インド管区長パードレ・フランシスコ・カブラルが、マカオ

のコレジオに反対して<sup>インフォルマテイオネ</sup>狎下に送った情報の中に纏めて記した諸理由、およびパードレ・ヴァリニャーノが同じく<sup>ヌマ</sup>狎下に送った上述の諸理由への回答と解決策とを見た上で、これを書き送る。

パードレ・ヴァリニャーノは日本人イルマンの叙品を希望し始めたが、私は日本人を司祭に叙品すべきか否か、疑問を晴らすことは出来ないと言いたい。というのは確かに彼らは、司祭職への適性を備えその資格あるわれらの仲間のイルマンたち<sup>フラテツリ</sup>であれ、同じく司祭職のための同様の資質を備えたセミナリオの生徒たち<sup>アルンニ</sup>であれ、いずれ叙品されるが、イエズス会への召命もそのための資質も持たないであろう。それにもう着手する時期かどうか、この件でわれらの仲間のイルマンやセミナリオの生徒に対してどういうやりかたで臨むべきかという点が、疑問の凡てである。

この第一点に関しては、日本の凡てのパードレには、始めるのは未だ早いと思われた。私も同様に思う。われわれがこのように思う理由は、日本の統轄を取り上げて<sup>スマリヤ</sup>いる、パードレ・ヴァリニャーノが<sup>フラテツリ</sup>狎下に送った要録から推測出来る。そこでは、日本人イルマンの性格・慣習・性向を記述している。また前述の要録の第一六・第

一七章への補遺<sup>アディテイオネ</sup>第八から、一層明確になる。この補遺は巡察師パードレが、パードレ・ヒル・デ・ラ・マタを介して猥下に送ったものである。彼は管区代表<sup>プロクラトル</sup>として当地から派遣された。パードレ・ヴァリニャーノがこの要録と前述の補遺の中で与えている情報により、現在日本人イルマンが司祭職への適性を僅かしか持たないことが分かる。即ち、信仰において未だ若くそして無気力な国民であるので、多くの理由により、不都合が生じる虞れがある。生来自分の意志を押し通す傲慢さがあり、禁欲が乏しく、共同の生活をしている他のパードレたちに余り服従せず、霊について熱心に欠け、さらにパードレ・ヴァリニャーノがこれら二箇所<sup>レ</sup>で記しているようなその他の資質がある。現在彼らがこれ程の難儀を与え、統轄するのが困難であるのなら、彼らが司祭になつた後には、如何に大なる難儀を与えることになるか、私は慮れる。

この外にも、イエズス会や信仰を棄てる危険がある。すなわち、異教徒領主の王国<sup>レンニ</sup>に逃げこんだり、妻を娶つたり、躰きに満ちた生活をして、それに対して手の打ちようがない。同パードレ・ヴァリニャーノはこの補遺の中で、貞潔の点で彼らは今まで優れていると記すが、同

パードレがそこに記す如く、精神面に欠けたりその他の資質がある。司祭職<sup>サチエルドレイオ</sup>に就いたのを機に、キリスト教徒たちの大なる躰きになり、イエズス会の信用を損なうような、無秩序に墮落するのではないかという点が、非常に危惧される。日本のパードレたちはこの点を慮れるが、それも尤もなことである。

さらに非常に懸念されるのは、彼らを司祭にすることによって、イルマン<sup>フラテツリ</sup>であることによつて為し得る実りや大部分失うことだ。というのは司祭職の外に、葡萄酒の勤めを果し、ミサを挙行し、告解を聴くのに、彼らは多くの時間を費やさねばならないからである。これらの事柄のために、彼らは能力が劣るために、われわれヨーロッパ人以上に多くの時間を要する。われわれは果して彼らが、主として貧しい人々や下層の人々に対し、説教や教理教育や、キリスト教徒に対して戸毎に説教して歩くことや、言語を良く知らないわれらの仲間のヨーロッパ人パードレに対し、通訳として奉仕することや、現在彼らが行なっているような、キリスト教徒や異教徒の殿<sup>ト</sup>たちと話合つて、様々な交渉を行なうことに、精励するかどうか慮れる。というのは、経験によりわれわれは次のことを見ている。すなわち、彼らは謙虚さに欠ける

ために、イエズス会イルマンフラテツリになつて後は、同宿ドジキであつた当時はしていた多くの事をやりたがらない。それらはヨーロッパやインドでは、われらが仲間のイルマンが行なつてゐることなのだ。それは彼らが、通常同宿がやるような事をする、イルマンに備つた権威を失ふことになると思ふからである。というのは、われわれヨーロッパ人は言葉を良く知らない、上述の如き多くの事がうまく出来ないからである。もしも彼らが言葉を知つていたら、行ふところである。

われわれは次のことを慮れる。即ち、日本人司祭たちはヨーロッパ人「司祭」と同じになりたがり、彼らが現在行なつてゐる職務に、余り専念しなくなるに違ひない。ここからキリスト教会にとつて、非常に大なる損失が生じることであろう。それは彼らが、司祭職に就くこととで与えることが出来る援助に匹敵するものである。

結局、未だ「信仰面」新しく、不完全なこの国民について余り満足してゐないので、彼らの徳操・能力・貞潔の点での確実さについて、予め多くの実績を積まない限り、一人として司祭にするのは適當でないと思われる。この実績は、コレジオの中では示すことは出来ず、たつた一人のパードレと一緒に彼らが暮らすレジデンシアに

おいて、または彼らがキリスト教会を切り拓くことに従事してゐる所において、示すことが出来る。というのはそこにおいて彼らは、服従・靈的情熱・信心への愛、彼らの貞潔について持ち得る期待、瞑想への彼らの専念、宗教的紀律をあらわにする。結局そこにおいて、彼らの真のすがたが明らかになる。期待の持てる者と持てない者とが分かる。このことはパードレ・ヴァリニャーノが、上述の補遺第八に記してゐる。そこにおいて彼は、コレジオではなくレジデンシアにおいて、日本人イルマンが分かり、そして知ることが出来る、と言う。ということ、は即ち、同パードレ「ヴァリニャーノ」が今叙品したいと思つてゐるこれらイルマンは、この実績を積んでいないわけである。というのは彼らは常に、コレジオにおいて学習してゐるからである。

上述の如き諸理由や、狎下を飽きさせないために記すのを止めるその他の諸理由のために、日本のパードレたちは次のように考へた。即ち、司教は当地に駐錫してゐないし、迫害が続く間は来ることも出来ないであろうから、日本人イルマンフラテツリの叙品は問題にしない方がよいであろう。というのは、上述の諸理由により、それは非常に危険なことだからだ。司教が来ない間は、彼らはこの昇

進を期待していない。また彼らに対してそれを始めるのは、カーザ内で徳操の欠如の故に叙品の不可能な多くの者たちを、折角今は平穩無事なのに誘惑に駆り立てることになるであろう。彼らが、多大の難儀を与えることになるかも知れない。

それでもパードレ・ヴァリニャーノが、日本人たちが司祭職に就いて成功するかどうか経験を積むために、四人の叙品で満足するなら、さほど不都合ではないであろう。しかしながら、上に述べた如く同パードレは、一〇人ずつ全員を叙品したいと記しているし、日本人たちに最大の信頼を寄せているように認められる。このため日本のパードレたちは次のように判断する。上述の如き然るべき実績を積むことなしに、彼はそうするに相違ない。非常に早くそのことを始めるだろう。彼らを叙品するだろう、と。というのは、今マカオに行くこれらの人々は、常にコレジオにあってラテン語と日本語とを学習しているからである。このためパードレたちは、この決定と同パードレの見解とに不満である。もしもこの件を、準管区長パードレの協議会コンスルダや管区会議コングレガティオネにおいて投票権を持つ者全員の見解に委ねるなら、対策を講じるのは容易であろう。しかし彼は、そこに付託することも、

マカオとインドの世俗の人々の世論に従うこともなく、このことをはつきりと命じた。人数を減じる以外に対策はなかった。というのは、マカオに行く人々が備えていなければならぬと同パードレが記した資質を持つ者は、五人しかいなかったからだ。これらの五人でもなお、同パードレが記した条件を充たしていない。もつともそれは、他の者たちよりは危険性が少ないということでは選ばれたこれら五人以外の他の何人をも、送り出すことを彼はわれわれに許さなかったからである。というのは、彼ら〔他の者たち〕は証明されていないからだ。

この凡てを考慮し、日本人イルマンフラテツリたちの叙品の仕方に関する私が考え、および多くの人々の意見に添った進め方は、以下の通りである。日本人をイエズス会パードレとして、余り信頼することはわれわれには出来ないが、レジデンシアを引き受けてもらえる在俗司祭プレティセヨリを大勢養成することには、信頼を寄せることが出来る。そうすれば、それを預かっていたパードレたちが、そこから解放され、われらの仲間のパードレたちは地区長カゼ・レトラリカーザに移る。管区会議での決定に従って、そこからミッシオンミッシオンの様にレジデンシアに行つて助ける。日本人たちであつても、在俗司祭であるが故に、うまくいくと思われる。と

いうのは彼らには、イエズス会パードレたちに要求されるような信仰心プロフエティオネも資質も、求められないからである。

またもしも何人かの者たちが、あるべき資格を備えていなくても、彼らがイエズス会の名誉を損なうことはない。

しかし、何人かはイエズス会に入れざるを得ないし、彼らもまた司祭サチエルドテイになるわけだから、私は次のように

すべきだと思う。すなわち、セミナーオの生徒アルンニたちがラテン語と日本語の学習、および「神学」綱要コンベンティオとカテ

キズモに関する諸々の事柄の学習を終えたら、現在われらの仲間のイルマンフラテツリがしているように、パードレたちと

一緒にレジデンシアに住んで、キリスト教会に奉仕せねばならないものとする。そして彼らには、何年間か立派

に奉仕したら司祭にしよう、と告げる。もしも司教サチエルドテ・デル・ヴェスコヴォの司祭よりも早くイエズス会司祭になりたい

と望む者がいたら、何年間かレジデンシアにおいて奉仕をして、己れについて良い証を立てた後で、「イエズス

会」入会を許すこととする。このような証を立てた上で、イエズス会への特別の召命を顕し、中程より以上の資質

を備え、自分の責任を果たした何人かの少数の者を入会させてもよいと私は考える。この内さらに控え目であれば

ある程、彼らは上長になり、「われわれと」手を携えて

やつていくであろう。

既にイエズス会入会を許された者たちが、今まで行なってきたことを立派に成就出来ない内は、私はそうするのが良いと思う。というのは概して、これまでに彼ら

自身についてあからさまになつた事柄により、彼らをイエズス会パードレにすることに、それ程確信が持てない

からである。このようにして入会を許可されたこれら少数の者たちは、彼らの修練期間ノヴィチアトが終つて後、四〇歳位ま

では再びレジデンシアにおいて奉仕せねばならないと私には思われる。この年齢に達したら、彼らに

良カスイ・デイ・コンシエンティア心・問カスイ・デイ・コンシエンティア題を学習させ、司祭職に向けて指導すれば、彼らを叙品して司祭職を与えることも可能であろう。

キリスト教会を助けるための彼らの司祭職を信頼してというより、むしろ彼らの過去の労苦に報いるため、および他の者たちを努力して良い奉仕をする気持ちにさせるためである。この年齢で司祭になれば、そしてこれだけの

証があれば、貞潔の点でも傲慢の点でも、さほど危険ではないであろう。本性が既に衰え、落ち着き、上長たち

も、現在彼らが抱いている懸念材料に対し、一層安堵することであろう。

イエズス会への召命をそれ程に覚え、また入会を許



されるに値する程の資質を顯すわけでもないセミナリオ  
のその他の生徒アルニには、パードレ・ヴァリニャーノが要録スマリオ  
の中に記している如く、レジデンシアで何年間か奉仕し  
て然るべき満足の得られる実績を上げた後に、  
良カセイ・デイ・コンシエンテ心ア問ア題アを学習させ、司祭になるための教育を  
して、凡そ三〇歳になったら叙品することが出来るよう  
に私は思う。われわれの仲間のイルマンフラテたちよりも速や  
かに、セミナリオの生徒たちが叙品を受ける方がよいと  
私は思う。というのは、在俗司祭サチエルドテ・セコラレであるよりもイエ  
ズ会司祭であるが故に、はるかに必要性が大だとい  
ことを、日本人に分からせるのは良いことだからである。  
これによって彼らは、われわれの仲間の司祭たちに対し  
て、一層高い評価と信頼とを抱くであろう。

セミナリオの生徒たちの方が、われわれの仲間のイル  
マンたちよりも早く叙品に与るので、われわれの中でイ  
エズス会に入会しようという者が僅かしかないなくなるの  
ではないか、ということを慮れる必要はないと私は思う。  
というのは、イエズス会司祭サチエルドテ・デッラ・コンパニアと司教プレジテ・デル・ヴェスコヴァの司祭との  
間には、キリスト教徒たちから尊び敬われ、自らの存立  
に必要なものを所有する点で、大きな違いがどうしても  
あるからである。完徳と主への奉仕を望む気持以外にも、

同じ愛が彼らをして、むしろイエズス会司祭になりたい  
との希望を抱かせるに相違ないと確信する。たとい司教  
の司祭たちの方が一〇〜一二年早く叙品に与り、「イエ  
ズス会司祭は」それよりも遅く品級を受けることになっ  
ても。

同様に、その学習を終えてすぐに叙品に与らなかつた  
り、イエズス会への入会を許されなかつたりしたこと  
で、セミナリオの生徒アルニの忍耐力について懸念する必要はない  
と私は思う。というのは、司祭職またはイエズス会入会  
を許されることへの確実な期待が、彼らを我慢させてい  
るからである。とくに彼らは、奉仕ドジキ・デイ・セルヴィテイオの同宿とは異  
なつて然るべく丁寧に扱われているのであるから。今日  
までに彼らについて明らかになっている事柄以上のこと  
が顯れない限り、これが日本人の叙品に関する私の考え  
である。

マカオのコレジオについての第二点に関しては、  
管区会議コングレガチオネの直前に行なわれた協議会コンスルタにおいて、靈的な  
面と学問の点でわれわれの仲間の日本人を養育するため  
のコレジオを、マカオに作る事が良いかどうかにつ  
いて、長々と取り上げられた。この問題は仔細に検討され  
た結果、マカオより日本で養育した方がはるかに良い、

そこにコレジオを作る必要はないであろう、という結論に到達した。しかしながら、その後管区会議の第一項において、インドから分離して日本を管区にする件が取り上げられた。パードレ・ヴァリニャーノは、管区会議第一項に含まれた諸理由やその他類似の理由により、日本がマカオにコレジオを持つことなしには、これはありえない、と言った。管区会議は次の如き見解であった。すなわち、前述の「第一」項で述べられている如く、フェリペ国王や教皇がそれを支えるための収入を<sup>エントラタ</sup>与えるなら、このコレジオを作るのは良い。

巡察師パードレは日本を發つて後、シナから渡来した最初のナウ船<sup>ナウ</sup>で、次の如く書き送つて来た。コレジオを始めた。そこで学習させるために日本人イルマン<sup>フラマン</sup>たちを呼び寄せたい、と。大勢が私に語るところによると、同パードレが日本に来て自分の目でこれを確かめ、そうするのが良いと思っただけでなく、ほとんど凡ての者が巡察師パードレにそれを書き送つたということだ。今回パードレは、良心<sup>カズイ</sup>問題を学習させて三年で叙品するために、八十一〇人の日本人を呼ぶという。叙品するためイルマンたちを呼ぶことも、今度同パードレが作つたような別のコレジオをそこに持つことも、悪く、危険な、

そして多くの不都合をはらんだことだと皆に思われた。日本人イルマン<sup>フラマン</sup>たちがマカオのコレジオに学習しに行くのは良くない、と彼らが考える理由は次の通りである。

第一、マカオは裁判も統治もない、世俗人のみか<sup>ブレイ</sup>司祭・修道士<sup>レリジヨ</sup>の間にも、多くの無秩序と躓きとに充ちた土地だと言ふことが出来るので、これを見、そして知るわれわれの仲間の日本人イルマン<sup>フラマン</sup>たちにとって、弊害が大である。これは、そこでの実態を知つた者たちに現に起つたことで、その経験から分かる通りである。理性がそれを示す。この地がかくも無秩序である原因は、インド全域の端に位置し、ゴアから遠いからである。そのため、そしてまたシナ王国の土地故に、そこでは「インド」<sup>ヴィン</sup>副王は余り権力も支配権も持たないのだ。それ許りでなく、そこは日本に行くカピタンたちによって統治される。彼ら〔の統治〕は一〇一ヶ月しか続かないので、何ら努力をせず、その気もない。彼ら特有の関心事は、日本に渡来する自分のナウ船<sup>ナウ</sup>関係の仕事がうまくいくことだからである。

第二の理由は、日本人イルマンたちが学習のためにマカオに行くことにより、日本のコレジオが破壊されることにならう、そのため日本が時々何年間か叙品<sup>カサ・デイ・オルデイネ</sup>のカーザ

〔コレジオのことを指すか〕がない状態になる。というのは、パードレ・ヴァリニャーノは、加津佐の協議会と管区会議の見解を受けて、次のように命じたからだ。即ち、まずラテン語と日本語の学習を終えることなしに、セミナーオの生徒をイエズス会に入会させてはならない。もしも修練期間の後に、良心問題・哲学・神学を学習しにマカオのコレジオに行かねばならないとなると、彼らは日本のコレジオですることがない。というわけで、コレジオはそこで暮らす生徒がいないために、休止することになる。

また日本において、常に修練院を維持することが出来なくなる。というのは、唯一のセミナーオでは、毎年または隔年に修練院を構成し得る程の仲間を輩出することなど出来ない。日本は何年間かコレジオも修練院もない状態になるからである。これは、管区の霊的利益のため大なる弊害となり、二度にわたる協議会および管区会議の決定に反するということ以外にも、キリスト教会にとっても同じく大なる損害となるであろう。それは、コレジオがその所在地で生む実りが失われるからである。というのは、大勢の説教者や働き手がいる所ではじめて、(まだ生徒の内であつても)彼

らは教義を宣べ、教えることによつて、大いに助けるからだ。その所在する都市においてのみでなく、その近辺においても、学習の妨げになることなしに、日曜や休日の日に実りを生むことが出来る。コレジオはキリスト教とイエズス会とに、大なる光榮と信用とを与える。それは一つには、カーザの秩序・修道紀律、および授業によつてであつて、それによりキリスト教徒や異教徒たちが教化される。また一つには、主たる祝日において、聖務日課を執り行うことによつてである。

第三の理由、日本人イルマンたちが彼地で死亡するか、重症の鬱病にかかる虞れがある。マカオ市は気候が異なり、食物や暮し方が日本とは大変違うからである。このために日本人たちは、叙品に与るためならそれに打ち勝つてはあろうが、強い不快感を抱く。

第四の理由は、通常良心問題とその反復や講話は、言語で行われるが、日本人はポルトガル語を知らない。それを理解することが出来ない。同じくラテン語を読むことが出来ても、理解は出来ないであろう。というのは、ラテン語は日本語と大変異なるから、いくら彼らがラテン語を知つていても、ラテン語での授業を理解出来る程には知らないからだ。それは

これまでに、「神学」<sup>コンベンティオ</sup> 綱 要をラテン語で彼らに講じてきた経験から、分かる通りである。したがって、日本語で講じるかまたは、ラテン語で講じて日本語で説明する必要がある。長期にわたって日本に滞在することなしには、何人も教師にはなり得ないということは、マカオの生徒たち<sup>マストロ</sup>の障害になる。彼らは、ラテン語で聞き取る程にはそれを知らないし、日本語の説明には飽き飽きし、不愉快に思う。

第五、日本人とヨーロッパ人とと一緒に学習することは、悪い結果をもたらすと私は思う。というのは、日本人はわれわれの文字を書くのが下手で、遅い。また理解の面で、彼らは一般にヨーロッパ人より遅い。このため彼らは、うまく一緒に学習することが出来ない。もしも日本人たちが、理解し、話し、書くことでわれわれヨーロッパ人よりも劣っているのだということが分かると、彼らの鬱病<sup>マレンコリア</sup>が一層高じ、大きな難儀を彼らに与えることになるであろう。彼らが聞き取らねばならない事柄に關しても、同じく不都合がある。というのは、マカオやインドでは必要であつても、日本では全く役に立たないようなこともある。また日本人にとっては極めて重要な事柄も、ポルトガル人の間で暮らす者たちには、一向役

に立たないこともあるからだ。

第六、セミナリオの生徒たちは、良<sup>カスイ・デイ・コンシエンテイア</sup>心<sup>アルテス</sup>問<sup>テオロギア</sup>題<sup>クルソ</sup>および教養科目と神学の課程を学習せねばならず、そして彼らはマカオには行かないので、当地で彼らのために<sup>マエストロ</sup>教師を用意してやらねばならない。したがって、同じ授業のために、二倍の人数の教師が必要となろう。すなわち日本においてはセミナリオの生徒のために、マカオにおいては日本人イルマンたちのために。これが日本でなら、セミナリオの生徒と同じ教師で、凡てを為し得る。

第七、日本人たちがマカオに滞在して学習するとすると、長期間日本にいて言語や、日本人の扱い方、統轄の仕方を良く承知しているパードレが二人、または少なくとも一人は常にそこに居る必要がある。というのはその者がいないと、非常に大なる不都合が生じるかも知れないからである。この目的のためには、如何なるパードレでも充分だというわけではなく、優れた資質の人物でなければならぬ。それ故これは、どうしても日本の損害にならざるをえない。日本はそういつた仲間<sup>ソシエテイ</sup>が、大いに不足しているからだ。この理由により、パードレ・ヴァリニャーノが日本人イルマンたちを呼ぶよう命じて

いる今、彼は次のような命令を与えている。すなわち、膝の治療のためにマカオに行くことになっているパードレ・ペドロ・ラモンは、健康を快復して後も自分がインドから戻って来るまでマカオに留まり、その間日本人イelmanたちを守り助けるために、奉仕することを予定に入れておくように、と。一方パードレ・ラモンは、副院長ミニストロにするために別のパードレを呼んだ。このパードレは病氣であるが、同パードレ「ラモン」は次のように書き送った。たとい健康を快復しても、彼を送り出すのを許してはならない、と。というのは、日本からパードレ一人か二人を割かないことには、マカオにおいて日本人イelmanフラテツリたちをうまく養育出来ないことが、彼に分かっているからである。

第八の理由は、パードレ・ヴァリニヤノが望み、やり遂げたいと考えている主たる目的、すなわち日本人たちを彼らの母国の外で三年暮らさせることによって、本性と慣習とを変えさせようということは、達成するのは不可能と思われる。それは、何年間かマカオに滞在した多くの日本人について経験したことに基づく。彼らは、まるで日本を発った当時のように、その固有の慣習と彼らの本性の凡てに愛着を持ち、それに執着する。その同

伴者たちと一緒に当地からローマに行った四人の貴人フィタルギにも、同じ事が認められる。彼らはローマとスペインの首都を見、ヨーロッパの最良のもの、聖遺物と奇跡、大なる聖徳サンティタを見たことにより、信仰とその他の事柄を大いに深めたが、それにもかかわらず、自国と自国の慣習への愛着とその本性は、あれ程若い時に日本を出て、一〇年に亘って世界の最良のものを見たにもかかわらず、同じである。

したがって、これら「の貴人」にも同パードレが望んでいるような変化が認められないのであるから、いわんや同パードレがマカオのコレジオに行くように命じたこれらの人々の本性が、変化する筈がない。彼らは二五歳を過ぎていて、しかも僅か三年間そこに滞在するに過ぎず、おまけにマカオの退廃を目の当りにしてしまふ。コレジオにいる者の大部分は、インドの大まかさの中で入会を許され、昇進してきた者たちであるから、如何に教化され、満足し、そして靈的利益を得て戻っても、またたとい少しは改善したとしても、私はその利益は小さく、それは上述の不都合に比べれば、はるかに劣るよう思ふ。

これらの理由やその他、簡潔にするために省略したそ

の他の理由により、日本人フラテックイルマンがマカオに行つて学習するのは良くない、と私は考えるし、またそれは日本のパードレたちの見解でもある。今ここではコレジオそのものが問題になっているのであるから、マカオにはパードレ・ヴァリニャーノが希望しているようなコレジオではなく、今までのようなカーザのみが存在する方が良くないと私は考える。それは次の理由による。

第一の理由は、教皇やフェリペ国王が充分な収入インストマを与えないなら、出費が非常に膨大な額に上るに相違ないからである。この収入エントラダを彼らが給与してくれることは余り期待出来ないように私は思う。出費が膨大だと言うのは、マカオにカーザやコレジオが別々に存在するとなると、上長・教師・職員マストリ・職員オフィチアリ、および事務所オフィチネを重複必要とする外、一人当りの扶養のために、日本よりもマカオにおける方が二倍またはそれに近い額かかるからである。パードレ・ヴァリニャーノは自分の才覚で必要なものを調達しようと申し出ているが、しかしそれは同パードレが生きている間、今のようにならざるが、スベリオーレ・ウニヴェルサル全体の上長である間、続くだけであろう。彼の職務が終るか、または死亡するかしたら、別の上長は誰もそれをしてくれないに相違ない。そして結局凡ての負担が日本に掛かることにな

らう。

第二、日本人がそこに学習をしに行くのが適當でないとすると、マカオに二つのカーザが存在するのは、不要なことである。そこは小さな都市で、テリトリオ領土もなく、シナ人たちがそれを望みさえすれば、破滅する危険に常に曝されている。それは貿易を拒否したり、食糧を奪ったりするだけで事足りる。既に何度も行われたし、最近も二年前にあつた。即ち、シナ人たちがマカオ市を破壊するか否か、協議をした。しかし、ポルトガル人たちが追放されるに値するような事を行わない間は、彼らをそのままマカオに居住させる決定を彼ら〔シナ人〕がするのを、主はお望みになつた。この外にも、マカオ市にはストウディエンテイ生徒ガがない。というのは皆が商人で、インドでは法律の学習も医学の学習も行われていないので、サチエルドテイ司祭職プレテイに就いて自らを養うためにプレテイ司祭になることを望むような貧者でない限り、彼らが学習せねばならない理由がないからである。そのような人々は通常メステイメステイチである。

第三、日本に来るヨーロッパ人たちは、マカオに留めることなく日本に直行して、マカオのコレジオではなく日本において、日本語の学習やその他のシエンテイ学問チをさせる

方がはるかに勝るからだ。その理由は経験により、次のことが認められるからである。即ち、日本に行く望みをもってヨーロッパから来る者たちは、インドに何年間か留まると、殆ど常に、日本に来る望みを失うか、または大いに熱が冷めてしまう。したがって彼らが日本に直行しないで、マカオのコレジオに何年間か滞在したりすると、同じ事が起る虞れが極めて大である。

この外に、彼らが行わねばならない学習のためには、日本でそれを行う方がはるかに勝る。言語に関しては、それは既に明白である。またその他に關しても、立証可能である。というのは、もしも彼らが日本でそれを行うことが出来るなら、学問と一緒に言語や慣習や日本人に對する接し方を習得し、かくして土地や人に愛情を抱くようになり、学習を終えるや、すべてにわたって完全な働き手が出来上がるからである。このことは、当地で学習した大勢に認められる通りである。また彼らは学習の間に、たとえばセミナーオにおいて、或いはカーザでの何らかの仕事において、その他これに類した事など、多くの事柄において手助けをする。

第四の理由は、インドでは生徒が非常に不足しているので、彼らは毎年教養科目の課程を始めることが出来ず、

時々あちこちの課程で五、六年間過ごすことがある。それに加えてさらに、マカオのコレジオに送るためにカーザのわれわれの生徒から割いたりすると、ゴアには非常に僅かな生徒しか残らないことになる。同様な難問は教師にもある。というのは現在でもゴアでは、彼らが非常に不足しているのであるから、ゴア以外にマカオのコレジオにも教師を供給せねばならないとなると、それはさらに甚だしくなる。またもしもマカオの教師を日本から割かねばならないとなると、その不都合はさらに一層大きくなるであろう。

第五にして最後の理由は、日本のパードレたちや、インドの大多数のパードレから上ったこれ程の非難の声を押しこのコレジオを作っても、そのような無謀なことが永続きしてうまく運営され、必要な教師・上長および職員をこれに供給するなど不可能である。

以上が、イエズス会とセミナーオの生徒の日本人の叙品について、およびマカオのコレジオに關して、私の義務を果すために狹下に書き送りたいと考える事柄である。もつとも私は、狹下の命令が最善で、神の御意志に最も則していると確信する。これをもって私は擱筆し、狹下の祝福と聖犠牲とに身を委ねる。長崎、一五九六年一

月三〇日、フランチェスコ・パシオ。<sup>(22)</sup>

右の書翰の趣旨を次に整理する。

〔先ず日本人の司祭叙品の問題について〕

一、日本人の司祭職への適性について、ヴァリニャーノがその『日本諸事要録』第一六・第一七章<sup>(23)</sup>、および同補遺第八<sup>(24)</sup>に記す通り、その適性は乏しい。特に、信仰面の若さ、禁欲・貞潔の点での弱さ、共同生活で他のパードレに服する心の乏しさ、傲慢で謙虚さを欠くが故に司祭職に就くや、下位の職務を忌避するであろうとの虞れ、等が指摘出来る。そしてコレジオではなくレジデンシアにおいて、一人のパードレが日本人に日常接することにより、その資質を知悉することが出来る。

二、在日パードレはパシオ自身を含めて皆、現在は司教がいないことでもあり、日本人イルマンの叙品を問題にするには時期尚早だと考える。もしもヴァリニャーノが四〜五人の叙品で満足するなら、さほど不都合ではないであろうが、彼は一〇人ずつ全員を叙品したいと望んでいる。結局在日パードレたちの強い意向で、比較的条件を充たしている五人（コレジオ在学中）のみを、叙品を目指してマカオに送ることにした。

マカオのコレジオ（一）

三、日本人の叙品に関する、パシオを含む多くのイエズス会士の見解は、日本人を在俗司祭にして彼らにレジデンシアを任せるのがよい、というものであった。そうすればイエズス会パードレたちはカーザ・レイトラルに居住出来る。在俗司祭はイエズス会パードレ程には、信仰心と資質面で高さを要求されない。また、何人かが資質面で欠けていても、在俗司祭であればイエズス会の名誉を損なうこともない。

四、イエズス会入会やイエズス会司祭叙品から、日本人を全く排除するわけにはいかない。そこでセミナリオ生徒が、ラテン語・日本語・綱要（ゴメス著『神学綱要』のことか）・カテキズモ（ヴァリニャーノ著『日本のカテキズモ』のことか）の学習を終えた段階で、イエズス会イルマンの如く、パードレと一緒にレジデンシアに住み、教会活動に従事させる。そこで良い成績を上げた者のみに対して、本人が希望すればイエズス会入会を許可するのが良いと考える。そしてその後、彼らが修練期間と良心問題の学習等を終えて、四〇歳を過ぎてから司祭職に上げることが可能であろう。

五、その他のセミナリオ生徒（つまりイエズス会入会を許可される資質を備えていない者）は、レジデンシア

三一（一九二）



で奉仕させ、良心問題等必要な教育を与えた後に、三〇歳位で叙品を許し、在俗司祭にしてもよい。つまり叙品時期について、在俗司祭の方がイエズス会司祭よりも、一〇〜一二年早いことになるが、そのようにした方がよい。両者の間には内的充実の面に違いがあるし、また違いがあるのだということ、日本人に分からせる必要があるからだ。

〔次にマカオ・コレジオの創建について〕

六、管区会議直前の協議会において、日本人のためのコレジオをマカオに作ることを非とする結論に到達した。しかし管区会議において、日本を管区として独立させることが取り上げられた。ヴァリニャーノはそのためにも、マカオにコレジオを設置する必要があるとの見解である。八〜一〇人の日本人をマカオに呼んでそのコレジオで良心問題を学習させ、三年で司祭に叙品しようという。

七、在日イエズス会パードレは全員、その企図に反対している。理由は次の通りである。

(1) インド副王の支配権が満足に及ばないマカオは、教俗共に無秩序・躓きに充ちた土地柄で、日本人イلمانにとって弊害が大である。

(2) ヴァリニャーノは、セミナリオの生徒がラテン語・日本語を修得する以前に、彼らをイエズス会に入会させてはならない、と命じた。そこでもしも、修練院の後に良心問題・哲学・神学を学ぶために、日本人がマカオのコレジオに行くとすると、日本のコレジオは不要となる。また日本に唯一つあるセミナリオ（一五八七年末、それまで日本には上方と下につずつ都合二つのセミナリオがあったものが、伴天連追放令の煽りで合併し、唯一のセミナリオが下地方で活動を続けることになった。所在地は、有馬↓八良尾↓加津佐↓八良尾↓有家と移り、パシオの本書翰の日付け一五九六年一月三〇日当時は有家に所在した<sup>(25)</sup>）では、毎年または隔年に人材を修練院に送り込むことが出来ない。それ故結局、日本のコレジオ・修練院のいずれもが、行き詰まる。それは日本キリスト教会にとって損害である。

(3) 気候や食事等が異なるマカオでの生活に日本人が慣れることが出来ず、病気になる者が出る虞れがある。

(4) 日本人はポルトガル語が出来ないので、マカオ・コレジオにおける良心問題その他の講義は、日本語で講じるか、またはラテン語で講じて日本語で説明せ

ねばならない。したがって、日本に永年滞在した者でない、その教師は勤まらない。

(5) 日本人はヨーロッパ人に比べ、学習能力に面で劣る。従って彼らと一緒に学習させるのは、弊害が大である。指導すべき諸々の点でも、その必要度に差異がある。

(6) 日本のセミナーオの生徒のためにも、良心問題・教養科目（即ち哲学）・神学の教師を手当てせねばならず、したがって同じ学科のために教師が二倍必要になる。

(7) 日本人がマカオで学習するとなると、長期日本に滞在して言語や日本人の扱い方を熟知したパードレ一、二名が、マカオに常駐する必要がある。それは日本にとって損失である。

(8) ヴァリニャーノがコレジオをマカオに作るうとした狙いの一つは、日本人をポルトガル人社会の中で暮らすさせることで、彼らの内面を変えようということにあるが、それは達成不可能である。

八、右の七はマカオにコレジオを作ることに反対する理由であるが、逆にマカオには従来通り、カーザが存在し続けるのをよしとする理由は次の通りである。

(1) 経済的理由である。マカオにカーザとコレジオとが

別々に存在すると、それだけ人件費が嵩む。またマカオは日本より、生活費が二倍かかる。ヴァリニャーノは自ら調達すると言うが、しかし彼の代が替われば結局日本に負担が掛かってくる。

(2) 日本人がマカオで学習しなければ、従来通りカーザ一つあれば充分である。もしも他に、マカオのコレジオの生徒になる者がいるとしたら、それは貧しさ故に司祭になることを望むメステイソ位である。司祭になるための学科以外は教授されていない。

(3) 日本に来るヨーロッパ人は、途中マカオに留まって学習してから来日するより、日本に真直ぐに来て、日本で諸学科や日本語を学び、併せて習慣等を身に付ける方がはるかに優る。

(4) ゴアのコレジオは教師や修学生に不足しており、マカオのコレジオに割く余裕はない。

(5) 日本のイエズス会パードレ全員とインドの大多数のパードレの意見に反してこのコレジオを作っても、運営は不可能である。

右の如き趣旨に纏めることが出来るパシオの長文の書

翰に関して、少し記述する。書翰はその内容から、前後二つに区分出来、前半は日本人の司祭叙品（イエズス会司祭・教区司祭とも）の問題、後半はそれに関連して、マカオに日本人のためのコレジオを設立することの是非について、論じている。

前半の日本人司祭叙品問題は、ヨーロッパ人イエズス会士の日本人観の問題が絡む。これまで多くの機会に取り上げ、論じられてきた事柄<sup>(26)</sup>であり、私も少し記したことがある<sup>(27)</sup>。しばしば話題になる、ヴァリニャーノとカプラルとの間の日本人観の対立なるものも、パシオが右の書翰でヴァリニャーノの見解を引用しつつ、つまりそれに依拠して、日本人司祭叙品に対する慎重論を展開していることから明らかなように、根本的に見方が分かれたわけではないようだ。そうではなくて、カトリック聖職者としての日本人の資質に弱さがあることを共に認めた上で、その矯正の可能性について見解が分かれた、と言うべきであろう。そしてこの点パシオはどちらかと言うと、カプラルに近い意見の持ち主であったと言ってよい。この日本人観の問題については、これ以上の言及は避ける。

日本人司祭叙品について、基本的に右の如き見解で

あったパシオも、日本人司祭が全く不要だとは言っていない。彼はこのデイレンマを脱する方策として、イエズス会司祭と教区司祭とを、適宜使い分けることを提案する。この案にはイエズス会内に、多くの賛同者がいたという。

日本人の司祭候補としては、イエズス会イルマン（イエズス会士、コレジオ在学）とセミナリオ生徒（非イエズス会士）とがいる。前者イルマンは本来は、イエズス会司祭の候補である。ヴァリニャーノがマカオに新設するコレジオに入れて、学習を続けさせようというのも、彼らを対象にした話である。パシオは彼らイエズス会イルマンの内、厳選された五人のみについては、ヴァリニャーノの考え通り、マカオ・コレジオで諸学科を修得した上で、イエズス会司祭に叙品することを容認した。しかしその他大勢のイルマンについては、教区司祭にすべきだという。そして彼ら日本人教区司祭には、イエズス会のレジデンシアを任せるのがよいとする。イエズス会士の居住する機関は、基本的にカーザとレジデンシアとからなる。この二つの違いは、レジデンシアはカーザよりも規模が小さく、通常パードレー人・イルマン一人程度居住し、大抵はキリスト教会の中心を外れた地方に

所在した。<sup>(28)</sup>つまり、本来イエズス会司祭が居住する筈のレジデンシアに、日本人教区司祭に住ませ、イエズス会司祭は随時巡回すればよいと言う。

いま一方の司祭候補であるセミナリオ生徒についてであるが、彼らにも、イエズス会司祭と教区司祭の二つの道を用意する。この二つには、叙品に到る進度に差異がある。イエズス会司祭の叙品は四〇歳過ぎ、教区司祭は三〇歳位で、両者の間には一〇―一二歳の開きがある。

いずれにせよ、セミナリオでラテン語・日本語・綱要（ゴメス著『神学綱要』のことか）・カテキズモ（ヴァリニャーノ著『日本のカテキズモ』のことか）の学習を終えた段階で、レジデンシアに住まわせてその人物を見る。本人がそれを望み、そして要求される資質を備えているとの判断を下すことが出来た少数の者のみに、イエズス会入会を許す。修練期間を終えたら再度、四〇歳位まではレジデンシアで奉仕させる。この年齢に達したら良心問題を修得させ、イエズス会司祭として叙品する。

セミナリオ生徒の内右に記したような、イエズス会司祭になりうる資質を備えていない者たちは、右と同様の過程を経てレジデンシアに住ませ、人物を見た上で、良心問題を修得させ、三〇歳位で教区司祭としての叙品

を許す。

日本人司祭叙品に関するパシオの意見は、以上の通りである。要するに司祭候補たるイエズス会イルマン、セミナリオ生徒共に、極く限られた少数のみイエズス会司祭に上げ、そしてこの者たちに対してはヨーロッパ人イエズス会パードレと大きな違いのない処遇をする。しかしその他大部分の者は教区司祭にして、彼らにイエズス会レジデンシアを預け、日本人に対する日常の霊的指導をさせようとしたわけである。ヨーロッパ人イエズス会士の間の日本人蔑視は根強いものがあつたが、しかしその一方で日本人司祭を拒絶し通すわけにはいかないという事情もあり、この厄介な現実を、イエズス会司祭と教区司祭を使い分けることで解決しようという案で、ヴァリニャーノの考えとは異なる。現実に日本布教において、右のパシオの提案の通りに行われたわけではないが、しかし日本人聖職者問題の一つの解決策として、それはキリシタン教会の底流に流れ、折りに触れ表面化した。一七世紀に入り、マカオに日本人のためのセミナリオが作られた<sup>(29)</sup>のも、その一環と言うべきであろう。

マカオにコレジオを設立する件についてパシオは、第一回日本管区会議（一五九二年二月三日―一四日、長

崎)の直前に開催された協議会に於いて、慎重に検討した結果、その設立を非とする結論に到達した旨記す。その協議会とは、一五九二年一月九日〜二月二日長崎で開かれたものである<sup>(30)</sup>。この協議会の協議記録は遺っていないようであり、何が協議されたかは不詳である。引き続き開催された管区会議記録には、「管区会議の直前に、管区会議と同じメンバーのすべてのパードレと共に、二五日間にわたって協議会が開催された。そういうわけで、〔案件が多数に上るので、無理だと思われたにもかかわらず〕すべての案件が一二日間で終わることが出来た<sup>(31)</sup>。』と見えるが、協議会での協議の内容については記していない。また一五九二年三月一八日付け長崎発、パシオの総会長宛て書翰は、同協議会について触れるが、マカオのコレジオに関する記述はない<sup>(32)</sup>。従っていささか疑義が残るが、やはりこの協議会において、マカオ・コレジオの設置を非とする結論に至ったと解してよいであろう。

ヴァリニャーノはこの協議会の結論にもかかわらず、コレジオ設立を諦めなかった。この問題に限定した場合、ヴァリニャーノはほとんど孤軍奮闘に近いものであったが、その彼の立場を辛くも支え、コレジオ設置に向けて押し切ることが出来たのは、管区会議において、日本準

管区を独立の管区にするよう、総会長に要望することに決まったからだという。日本管区として独立する以上、マカオに日本のコレジオを設置すべきであるとの主張が、ヴァリニャーノによってなされた。

同管区会議議事録第一章では、教皇やポルトガル国王の経済的援助を受けて、マカオ・コレジオの設立を実現したい旨、表明されている<sup>(33)</sup>。同議事録にこのような趣旨の記載がなされたのは、ヴァリニャーノの強硬な主張によることは間違いない。

マカオ・コレジオ設立の問題は、先に記した日本人司祭叙品の問題と関連する。現にヴァリニャーノが同コレジオ設置に熱心であったのは、パシオが記している如く、彼が日本人司祭叙品に積極的であったからである。日本人イエズス会司祭の養成を目的としたコレジオを、彼が日本とは別に更にマカオにも設置しようという理由については、後に史料を引用して明らかにしたい。

それに対しこのパシオの書翰には、それをマカオに設けることを非とする理由が列挙されている。日本人司祭叙品についてのパシオの考えは、右に記した通りであるが、彼が考える日本人の司祭叙品に到る迄の過程において、マカオのコレジオはそのために別に何ら、重要な位

置を占めるものではない。彼がマカオ・コレジオの設置に反対するのは、従つて当然のことである。パシオの挙げる反対理由(七ノ(1)~(8))——パシオは在日イエズス会パードレ全員が反対であつたと言ふ——は、先にヴァリニャーノがそれを是とした理由の裏返しと言ふべきであらうが、現実的見地に立つた反対論と言えよう。

マカオ・コレジオの設置に反対することはすなわち、マカオのカーザが従来通り存続することを是とするものである。パシオは最後に、同カーザ存続をよしとする積極的理由を挙げて、書翰を終えている。その八ノ(2)(3)に、マカオにコレジオを創設しても、日本人を対象にしないとなると、司祭を目指してそこで学ぶものはメステイン位である、ヨーロッパ人は途中マカオで学習を終えて日本に来るよりも、日本に直行して日本で学習した方が利点が大である旨見えるが、これなども現実を踏まえた見解と言ふべきであらう。

注

(1) マードレ・デ・デウス・コレジオとも呼ばれた。このマカオ・コレジオの名称の問題については、拙稿「マカオのセシナリオ」(『史学』六四ノ一)一・二頁で触れた。

(2) Manuel Teixeira, *Macao e a sua Diocese*, III, Macau,

マカオのコレジオ (一)

1956-1961, pp. 170-178, 181-184, 189-197, 312-324; IX, Macau, 1969, pp. 79-84, 298-304; XII, Macau, 1976, pp. 313-338. なおテイシエイラがこの中で、同コレジオ関係として挙げ、そして引用する文献・史料の主なものは、次の通りである。Francisco de Sousa, *Oriente Conquistado*. Francisco Paulo Mendes da Luz, *O Conselho da Índia*. Álvaro de Semedo, *Imperio de la China*. Barbosa Machado, *Memórias para a História de Portugal*. José Montanha, *Aparatos para a História do Bispado de Macao*. 等。

(3) *Archivum Romanum Societatis Iesu*, Jap. Sin. 23, ff. 287-290.

(4) J. F. Schütte, *Monumenta Historica Japoniae I*, Romae, 1975, p. 1143.

(5) Loyola, *Constitutiones Societatis Jesu*, t. II, Roma, 1936, pp. 382-491.

(6) *Ibid.*, t. II, pp. 518-559.

(7) 『史料綜覧』卷一二、三四八頁。卷一三、一九頁。

(8) Jap. Sin. 23, ff. 299-311.

(9) 拙訳『イエズス会と日本』一、岩波書店、一九九三年、当書翰全文は一六八—一九三頁、特に關係箇所は一七四—一八四頁。

(10) Jap. Sin. 12-I, f. 124, 124v.

(11) Schütte, *Monumenta*, I, p. 1291.

(12) Jap. Sin. 12-I, f. 41.

(13) Jap. Sin. 12-I, f. 41v.

- (14) Jap. Sin. 12-I, f. 41v.  
 (15) Jap. Sin. 12-I, f. 114v.  
 (16) Jap. Sin. 12-II, f. 223.  
 (17) M. Teixeira, Macau e a sua Diocese, III, p. 382; XII, pp. 339-398.  
 (18) Jap. Sin. 12-I, f. 114, 114v.  
 (19) 拙著『キリシタン時代の研究』岩波書店、一九七七年、二四一—二四九頁。拙著『キリシタン時代対外関係の研究』吉川弘文館、一九九四年、四〇三—四〇五・四二一—四一九頁。  
 (20) Jap. Sin. 23, ff. 285-291, 293-296.  
 (21) Jap. Sin. 23, ff. 299-311.  
 (22) Jap. Sin. 12-II, ff. 351-353v.  
 (23) A. Valignano, Sumario de las Cosas de Japón, J. L. Alvarez-Taladriz ed. Tokyo, 1954, pp. 198-206. ヴァリニャーノ著、松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社、昭和四八年、九一—九九頁。  
 (24) A. Valignano, Adiciones del Sumario de Japón, J. L. Alvarez-Taladriz ed., Osaka, 1954, pp. 569-583. 井手勝美著『キリシタン思想史研究序説』ペリカン社、一九九五年、一〇九—一二六頁に補遺第八の邦訳。  
 (25) 片岡弥吉「イエズス会教育機関の移動と遺跡」(『キリシタン研究』一一輯)二・一〇—一四・二三頁。  
 (26) 最近では井手勝美著、前掲書の特に第一部2、その他。  
 (27) 拙著『キリシタンの世紀』岩波書店、一九九三年、四五—五九頁。  
 (28) 拙稿「イエズス会日本管区」(『岩波講座 日本通史』近世1、一九九三年)二八八—二九二頁。  
 (29) 拙稿「マカオのセミナーオ」(『史学』六四ノ一)前掲。  
 (30) J. F. Schütte, Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650, Romae, 1968. pp. 613, 905.  
 (31) Valignano, Adiciones, Alvarez-Taladriz ed. p. 733. ヴァリニャーノ著、家人敏光訳編『日本のカテキズモ』前掲、三三二—三三三頁。  
 (32) Jap. Sin. 11-II, ff. 296-297.  
 (33) Valignano, Adiciones, Alvarez-Taladriz ed. p. 683. ヴァリニャーノ著、家人敏光訳編『日本のカテキズモ』二五六—二五七頁。